

P2-26-3 当院で経験した、UAEを要した産褥晩期出血9例の検討

愛染橋病院

坪内弘明, 芝 博子, 久 裕, 正木秀武, 奥野健太郎, 新井裕代, 佐々木記久子, 早田憲司, 今井史郎

【目的】当院で経験した、子宮動脈塞栓術(UAE)により治療しえた産褥晩期出血を検討し、その発生原因や予防方法を探ることを目的とした。【方法】2008年4月～2012年8月に、当院においてUAEを要した症例の中から産褥晩期出血症例を抽出し、後方視的に検討した。本研究は、施設内倫理委員会の承認を得た。【成績】全分娩件数7076件中、産褥晩期出血は9例(0.13%)であった。平均年齢33歳(21～40歳)、初産婦7例(78%)、双胎3例(33%)、平均妊娠週数28週(12～38週)、IUFD3例(33%)であった。分娩～UAEまでの平均日数は31日(8～110日)であった。全例に造影CT及び血管造影検査を施行した結果、遺残胎盤6例(67%)、子宮内仮性動脈瘤2例(22%)、帝王切開後の子宮創部からの出血と思われるものが1例(11%)であった。遺残胎盤6例においては、IVF/ICSI症例4例、子宮内掻爬の既往は4例であった。また、妊娠中の持続的な出血を認めた症例が4例、PPROM3例、流早産4例であり、炎症・感染との関連性が疑われた。児娩出後に胎盤娩出困難であった症例は6例中5例であったが、6例とも退院時あるいは晩期出血前にはエコー上遺残胎盤の診断がついていなかった。子宮内仮性動脈瘤の2例については、一般的にtraumatic deliveryが多いと言われているが、帝王切開・経陰分娩1例ずつであった。9症例ともUAEにより止血し、その後の経過は良好であった。【結論】UAEを要した産褥晩期出血は全分娩の0.13%に認め、その原因としては遺残胎盤が最も多かった。遺残胎盤は分娩後数日の退院時には診断が困難であり、遺残胎盤のハイリスクと考えられる症例では超音波検査を過信せず、慎重にフォローする必要があると考えられた。

P2-26-4 当センターにおける過去5年間の子宮腔内への止血バルーン使用症例22症例の検討

泉州広域母子医療センター・りんくう総合医療センター

智多昌哉, 西川愛子, 高岡 幸, 徳川睦美, 後藤摩耶子, 吉田 晋, 佐藤 敦, 鹿戸佳代子, 福井 温, 長松正章, 荻田和秀

【目的】産褥出血は依然妊産婦死亡の主原因であり、その初期治療が重要であるとされている。当科では4年前より止血バルーンを用いた産褥出血治療を行っており、その適応と効果について検討した。【方法】当科で2008年4月から2012年9月までの5年間に当院で経験した周産期大量出血の症例のうち、止血バルーンを用いて止血を試みた症例について後方視的に考察した。【成績】4994分娩のうち産褥出血の適応で止血バルーンを用いて止血を試みた症例は22症例であった。止血バルーンを用いた症例の内訳は帝王切開16例、経陰分娩6例であり、診断は弛緩出血13例、子宮内反症1例、前置胎盤3例、癒着胎盤3例、胎盤ポリープ1例、子宮破裂1例であった。止血バルーンのみでの止血成功は16症例、残る6症例は止血バルーン単独での止血は無効であり、うち2例はUAEを追加、1例はガーゼ圧迫、3例は子宮全摘術となった。止血バルーンでの有害事象はなかった。子宮内反症および弛緩出血でも全出血量2000ml以下のバルーン挿入となった症例では全症例で止血に成功していた。一方、子宮全摘となった症例ではフィブリノゲンの値が100以下と低く、DICスコアも8点以上であり、DICが重症化してから治療開始であった。【結論】産褥期大量出血に対してはDIC前の早期の止血処置が重要と考えられる。止血バルーンは手術室や分娩室でも使用できる極めて有効な初期止血方法であるが、DICの進行した症例には初期より他の止血方法も検討するべきであると考ええる。

P2-26-5 産科疾患への血管内治療の有効性：当院6年37症例の経験

自治医大

小林真実, 桑田知之, 廣瀬典子, 薄井里英, 大口昭英, 松原茂樹, 鈴木光明

【目的】産褥時や手術時の大出血に対して、動脈塞栓や血管内バルーン留置が広く行われるようになってきた。当院における産科疾患への血管内治療37例に関して、1)対象疾患、2)疾患毎の臨床像の特異点、3)有効性、4)副作用を検討した。【方法】平成18年9月～平成24年8月の6年間に、当院産科より血管内治療部に依頼した37例を対象とし、後方視的に検討した。【成績】1)対象疾患(n=37)内訳：前置癒着胎盤(13)、仮性動脈瘤(11)、遺残胎盤(5)、腔壁血腫(4)、弛緩出血(2)、帝王切開創部妊娠(2)。2)特異点：前置癒着胎盤(13)に対しては総・内腸骨動脈へのバルーン留置施行。7例にcesarean hysterectomyが行われ、7例全例でDICの発症を認めなかった。残り6例は胎盤剝離ができたため、バルーン血流遮断せずに済んだ。仮性動脈瘤は、これまで帝切後により高頻度に発症すると記載されてきたが、経陰分娩後発症の方が帝切後発症よりも多かった。仮性動脈瘤と遺残胎盤計16例のうち、大量性器出血初発例が12例と多数を占めたが、残り4例は出血を主訴とせず、定期診察超音波で発見された。腔壁血腫は外科的治療困難が予想される症例で、子宮動脈、腔動脈塞栓が行われた。3)2例で約1週間後に血流再開し、再度塞栓術施行。他の35例では1回のみの塞栓であった。4)短期副作用なし。長期の影響は今後検討の余地がある。【結論】前置癒着胎盤では、血管内バルーン留置が有効。仮性動脈瘤では、出血前の未破裂動脈瘤が定期診察超音波で発見された。未破裂動脈瘤の自然史は不明だが、塞栓術が破裂による大量出血を予防している可能性がある。